

湯ふねのなかにて歌をおもう會津八一

大正10年大分・別府温泉逗留中の詠歌をめぐって

仲 嶺 真 信

はじめに

秋艸道人・會津八一（以下、會津と略す）の三絶として「短歌」「美術史研究」「書」が知られている。いずれも會津の特質を示すキーワードであり、とりわけ奈良を詠んだ歌人として傑出している。

たとえば『南京新唱』中に「病中法隆寺をよぎりて」として詠んだ歌が数首見られる。しかしながら會津の書簡（以下『會津八一全集 第8巻』中央公論社 昭和57年初版を典拠とする）を見れば、実際は、別府・浜脇温泉立花屋の「湯ふね」に浸かって仕上げた歌であることが判明する。このように會津の歌について熟慮すると実に興味深い事柄が発見される。このような例は、次の有名な詠歌の場合にも注目すべき関連性が窺えるが、その「時と場」を考慮する場合に十分に留意を要する点でもある。そのことをもう少し具体的に示すために、以下に會津と亀井勝一郎との対談「奈良の思ひ出」の一部を紹介しながら言及してみよう。

「(唐招提寺にて) おほてら の まろき はしらの つきかげ を つちに
ふみ つつ もの を こそ おもへ」*¹に対する対談*²

亀井：唐招提寺の「まろきはしらの……」のお歌はその時にお作りになつたんですか。後ですか。

會津：それはね、法隆寺に行つて、そしてその帰りに唐招提寺で日が暮れて、その時に詠んだ歌です。ところが「渾齋隨筆」に書いてをりますけれどね、脇に一緒に行つた人がね、ついて行つた美術学生が一人あるんです。それが言ふわけだ。ぼくが法隆寺に夕方お供したら、もう月が出てをつて、回廊のね、あそこに丸柱があるでせう。それがきれいで、先生はそれを見て、「まろきはしら」と一人ごとを言つてをられたもんだ。だから着想は法隆寺でね。できあがったのは唐招提寺です。いつ詠まれたつて、法隆寺でできたものぢやないかと言ふから、おまへそんなこと言ふなど。話が面倒くさくなつて困ると言つてもね、事實はさうださうだと言ふ。それでそのことを隨筆の中に書いたんです。

この対談は、作歌の「時と場」について考える際の微妙で興味深い問題を提供している。この場合は、歌の着想から完成までの経緯が語られている。法隆寺か、あるいは唐招提寺かということは、「話が面倒くさくなる」と會津は語っているが、「月が出てをつて、回廊のね、あそこに丸柱があるでせう。それがきれいで」という流れを酌めば、いよいよエンタシスの柱を想起せざるを得ない。法隆寺・唐招提寺、何れの伽藍にもエンタシスの円柱が見られることを鑑みれ

ば、この歌はますます味わい深いものに思える。

湯ふねのなかにて歌をおもう

さて本題にもどって、大分・別府温泉逗留中（毎日、読書と散歩と探仏をしながら）の詠歌数首は、後に出版された歌集に収録された歌もあるが、一方未収録のままに眠っている歌も数首見られる。ここではまずはじめに、その歌集に収録された中の二首を任意で紹介しよう。

その一

おほてら の かべ の ふるゑ に うすれたる ほとけ の
まなこ われ を み まもる*³ (歌集)

これは、會津書簡に収録された、大正10年11月25日の出来事*⁴、すなわち市島春城（本名、市島謙吉〈1860-1944〉：早稲田大学初代図書館長）宛に別府より出した絵はがき（二枚つづり 正倉院御物）に添えられた数首の歌の一つを推敲したものと考えられる。ちなみに当日の書簡は語る。「今朝湯ふねのなかにて歌をおもふ。これまでよみおふせざりしものをとにかく三十一文字にまとめあげ得たり。奈良のものあり別府のものあり。そのまゝ覽に供して正を仰ぎ候」と記す。実際の書簡では次の通り。

8 ふる寺のかべ繪の面にうすれたる佛のまなこ尚ほ吾をみる
(なお、歌の前に付けた番号は別府発の書簡で紹介された歌の順位を示す)

歌集収録の歌には、わずかな変更が見られるが、歌意そのもののは失われていない。「ふる寺」が「おほてら」になり、文字のすべてにおいて會津独特の「かな」が抑揚を付けて詠み上げる際の適度な間合いを置いて表記され、洗練されたものとなっている。奈良に慣れ親しんだものにとっては、直ちに法隆寺金堂壁画を詠んだ歌と判断できる。

その二

ほろび ゆく ちとせ の のち の この てら に いづれ
の ほとけ あり たたす らむ*⁵ (歌集)

この歌もその一と同時に「法隆寺」にて詠んだことが、書簡に見えている。自註*⁶では「ほろびゆく・万物は推移し、何物も遂には滅亡を免れず」と言い、「千年の後事は、何人も思ひよるべきところならむ」と触れている。無常なる千古の歴史を経て、なお存続し続けるほとけに対する「有りがたき」感慨を吐露した一首である。

ところで、まさに後事のことであるが、法隆寺金堂解体修理に伴う壁画模写事業中の、昭和24(1949)年1月26日早朝、金堂より出火し炎上した事件を思い起こせば、會津の「何物も遂には滅亡を免れず」という適言は、皮肉ながらもいっそう感慨が深い。書簡ではこう詠っている。

9 ほろびゆくちとせの後のこの寺にいづれの仏ありたゝすらむ(以上法隆寺述懐*⁷)

前掲の歌同様、文字の全てが「かな」に変わり、「の」の字の繰り返しを多用することによっ

て流麗さが生まれている。書簡には、會津が信頼を寄せ師と仰ぐ市島春城宛はがきに「そのまゝ、覽に供して正を仰ぎ候」と記しているように、まさに作りたてのままの歌の素顔が看取され、會津の率直な面が窺える。

ともかく前掲の詠歌は、全て初めは『南京新唱』に、後に『自註鹿鳴集』に収録されている。前者は、大正13年に春陽堂から出版された會津の処女歌集として有名である。『自註鹿鳴集』には明治41年に初めて南都逍遙を行った時以降の奈良を詠んだ歌を主軸として、長野・山田温泉療養時の「山中高歌」、中国・四国を旅した時の「放浪唸草」、秋艸堂を詠んだ時の「村莊雜事」などの歌集が再収録されている。ちなみに「その一」「その二」として紹介した二首は「南京新唱」に収録され、一方「放浪唸草」には拙稿で扱う「別府にて」七首、「鬼の岩屋といふところにて」一首、「別府の宿より戯に奈良の工藤精華に贈る」一首、「別府のやどりにて夢想」一首、「大分市外上野の石仏をみて」一首、「豊後海上懐古」三首、「耶馬溪にて」十一首、「自性寺の大雅堂にて」四首の合計二十七首が載録されている。なお拙論では、耶馬溪と大雅堂を詠んだ歌については、紙幅の都合上割愛する。早速次に大分・別府温泉逗留中の詠歌について紹介しよう。

大分・別府温泉逗留中の詠歌

大正10年11月22日 市島春城宛 大分上野の石仏をみてよめる*8。

- 1 旅人のさしてやすぎし草花のかれてつめたきみほとけの胸
上記と同文（歌集）
- 2 ひゝわれし石の仏のころも手をつづりてほそき蔦紅葉かな
ひびわれし いし の ほとけ の ころもで を つづりて あかき
ひとすぢ の つた （歌集）

この二首中、1は「羈旅詠草」*9に、2は「放浪唸草」*10に収録される。なお、書簡には見られないが「羈旅詠草」には「大分市外上野の石仏をみての中」としてもう一首次の歌が加えてある。

旅人のさしてやいにしひとえだのきくかれはてしみほとけのひざ*11 （歌集）

上記三首は、閑寂な秋色の深まりと石の仏の進みゆく崩壊の様子を感じさせる。もとより會津は、奈良では数々の石の仏の歌を詠んでいる。たとえば『南京新唱』（明治41年より大正13年に至る）収録の「奈良坂にて」と題した次の歌にも味わい深い季節感が漂う。

ならざかの いし の ほとけ の おとがひ に こさめ
ながるる はる は き に けり*12

會津によれば「ならざかは、般若寺越えの坂のことで、その上り口右側の路傍に俗に〈夕日地藏〉と名づけて七八尺の石像あり。その表情笑ふが如く、また泣くが如し*13」と自註を入れている。一方會津は、崩れゆく石のほとけに向けて哀歌も詠む。『南京新唱』収録の「滝坂にて」と題して紹介する次の歌がその一例。

かけ おちて いは の した なる くさむらの つち と

なり けむ ほとけ かなし も^{*14}

會津は「かかる佛もあるべしと想像して詠みしなるも、俗に〈寢佛〉と名付けて、路傍に顛落して、そのまま横たはり居るものもあるなり^{*15}」と言う。現在でも身近で自然の石から生まれ自然の土に回帰する石のほとけが散見されるだけに、その生滅の推移に無常觀を看取することができる。

大正10年11月22日

書簡には「大分より別府にもどらむとすときかんたん菡萏の濱にて潮の色のあざやかなるにおどろきて」と述べた後に次の歌が見える。

- 3 山ひくゝうす紫にさしいで、藍を湛ふる菡萏の海^{*16}
山ひくくうす紫にさし出でて藍を湛ふる菡萏の海^{*17} (歌集)

これは歌集「羈旅詠草」に見られる。書簡同様前置き文がある。歌は別府湾及びその臨海の情景を写している。ここは、遠くに低く長く延びる国東半島全体が一望できる景勝地。また大分と別府を結ぶ幹線道路の大分市街西端に位置し、柞原八幡宮参拝路入り口にあたる風光明媚の地でもある。菡萏は、現在は「かんたん」と地名表示する例が多く見られるが、明治16 (1883) 年以前、別府湾は一般的には菡萏湾と呼ばれていたことが分かる^{*18}。

ところで、1・2・3の歌で會津の詠う大分上野の石仏とは、現在の元町石仏・岩屋寺石仏の両磨崖石仏を示す。前者は、會津が見た当時よりも崩壊がかなり激しく、薬師如来を中尊とする群像の像容のみが判明する。しかし儀軌を駆使して像容を判別すると、その右脇群に不動明王・矜羯羅童子・制多迦童子を配し、一方の左脇群には、多聞天・吉祥天・善膩師童子を置くことが分かる。一方の后者は、現状では群像が破損・崩落しており、その像容の明確な判別はし難い。ただし、仏龕の最も左端の十一面觀音像のみは、頭部の特徴からそれと判別できる状況である^{*19}。

大正10年11月25日 市島春城宛 別府より 絵はがき (二枚つづり 正倉院御物)

- 4 しげひらの烏澁のをのこがまがつ火にとけとろゝぎし仏をぞおもふ (東大寺懷古^{*20})

この歌は、最終的におそらく下記のように変更されたものと思われる。書簡では下線部のように「とけとろゝぎし仏をぞおもふ」で終わるが、歌集では「やけとろゝぎし仏かなしも」と推敲し仕上げている。冒頭部「しげひら」に続く「のをこのをのこ」の部分では、「の」「を」「こ」の同音の繰り返しで一氣にリズム感を高め、直ちに中の句「まがつ火」を凄まじく加勢するという、緊迫感が漂う。それに対して最終句「仏かなしも」は短い句ながら、ゆるやかで情趣深い。

しげひらの烏澁のをのこがまがつ火にやけとろゝぎし仏かなしも^{*21} (歌集)

この一首は「東大寺懷古の中」と記す。即ち平安末の平重衡による南都焼き討ち事件にちなむ東大寺大仏殿被災の悲惨さを追想している。「烏澁(をこ)」は「愚か・馬鹿」すなわち逆臣・重平を指し、「まがつ火」は「禍津日(まがつひ: 災難や凶事などをいき起こす神)」をかけている

詞であり、「とけ」が「やけ」に変更され、炎上し溶けた大仏への悲しみが、いっそう強調されている。

- 5 宮島とひとの指さすともし火を左に見つつ船はすぎゆく*22
 みやじま と ひと の ゆびさす ともしび を ひだりに み つつ
 ふね は すぎ ゆく*23 (歌集)

この一首は『放浪喟草』に収録。詠み上げる間合いを適度にとりながら、かな文字にすべて変換されている。自註は「ひとのゆびさす・同船の客が指さして教へたるなり*24」と言う。

- 6 水際よりななめにひくくのぼる灯の果にやおはす市杵島姫*25
 みぎは より ななめに のぼる ともしび の
 はて に や おはす いちきしまひめ*26 (歌集)

ここでも詠み上げる間合いを按配しながら、文字はすべてかなへ置換。自註では「はてにやおはす・夜の空の中に燈火にて位置を推定せるなり。市杵島姫命、島名と同語原なること明らかなり。田心姫命(タゴコロヒメノミコト)、湍津姫命(タギツヒメノミコト)の二柱と合祀する」と巖島神社の祭神について述べている*27。現在に比べ余計な照明が少ない時代の、漆黒の闇にかぶ篝火や松明の幽玄な姿を彷彿させる。書簡に「奈良のものもあり、宮島のものもあり、別府のものもあり。そのままに覽に供して正を仰ぎ候*28」というが、まさに歌作の舞台裏を直に覗き見る思いがする。

- 7 壁の絵はあまつ乙女の裳のすそのちぎれちぎれにもものふりにけり*29
 壁の絵のあまつをとめが裳のすそはちぎれちぎれにふりにけるかも*30 (歌集)

歌集には「病中法隆寺をよぎりて の中」と記す。歌は下線部「乙女の」が「をとめが」とかな変換されている。当初の「ものふりにけり」は、「裳を振る」と「物古る(何となく古びる)」とをかけた詞と見られるが、歌集では文末に「ふりにけるかも」と詠嘆の「かも」が加えられている。ここで歌う「をとめ」は、おそらく金堂壁画中の飛天群をさすものと思われる。よって裳は飛天の着衣のこと。

- 8 ふる寺のかべ絵の面にうすれたる仏のまなこ尚ほ吾をみる (既出)
 おほてら の かべ の ふるゑ に うすれたる ほとけ の
 まなこ われ を みまもる (既出、歌集)

- 9 ほろびゆくちとせの後のこの寺にいつれの仏ありたゝすらむ (以上法隆寺述懐*31)
 書簡に「病中法隆寺をよぎりて」とある。前記で触れたのでここでは割愛。

- 10 いかし湯のあふるゝなかにもろ足をゆたけくのべて神の代をおもふ*32
 (参照：18 いかし湯のあふるゝなかにもろあしをゆたけくのべてものおもひもなし
 いかしゆのあふるゝなかにもろあしをゆたけくのべてものおもひもなし*33(歌集))

10は歌集には未収録。因みにこの歌では末尾句「神の代をおもふ」と重厚感が見られるが、こ

の歌意に近似する18の一首は、逆に「ものおもひもなし」と、まさに入湯効果と言うべき開放感に浸っている。後者は、歌集においては全部かな文字に変換。自註にも「いかしゆ・効験ある温泉。もろあし・両脚、雙脚。良寛の詩には〈長ク両脚ヲ伸シテ睡ル〉といふ句もあれど、それにかぎらず、かかる表現は、更に古く『寒山詩』の中にもあり、東洋的にはありふれたることなり^{*34}」とある。ともあれ、両者は、別々の歌とも見える。あるいは、また日を変えて作り直したとも思える。

- 11 ゆのやどの暗きあかりによむふみの挿絵にほそきみほとけの眉 (以上二首別府^{*35})
湯のやどの暗きひかげによむふみの絵にかそかなるみほとけの眉^{*36} (歌集)

歌集には前掲10の歌は収録されず、こちらの一首のみ選定。歌集には「別府にての中」とあることから一首に限定したことが窺われる。「ゆ」は「湯」とし漢字変換。「挿絵」が「絵」に替えられ、最終的に歌は暗き「あかり」から「ひかげ」に転じているが、湯の宿にて眼を凝らしながらも持参した本の挿絵の仏の眉に惹かれる會津自身の心情が察せられる。

- 12 そらにみつやまとの方に立つ雲は君がいぶきのさざりなるらむ^{*37}

書簡には「戯に奈良の工藤精華に申送る」とある。この歌は、旅にあっても奈良で初めて美術写真館を営んだ工藤利三郎に対する思いが込められており興味深い。当時極めて希有な存在の古美術写真について、會津は強い関心を抱いており、工藤との妙な交友があった。なお會津と工藤の関係については、小説仕立てだが、中田善明の著作に面白く紹介されている^{*38}。

そらにみつ やまの の かた に たつ くも は きみ が
いぶきの すゑに かも あらむ^{*39} (歌集)

歌集では下線部のように一部変更が認められる。會津は「工藤精華・その頃奈良に住みてよく酒を嗜みたる老写真師。古美術の撮影にて知る。『日本精華』^{*40}の著あり。そらみつ・「やまと」の枕詞。いぶき・息を吹くこと。この歌は、この老人のつねに好みて壮語するを諷したるなり」と述べている。

- 13 橘のこぬれとを (わ) に吹く風のやむときもなくいにしへおもほゆ (窓前^{*41})
(たわわ) *書簡では歌の脇に小さく記入。
たちばな の こぬれ たわわに ふく かぜ の やむ とき
もなくいにしへおもほゆ^{*42} (歌集)

自註では「たちばな・橘。わが宿りし旅館の前庭にも多くこれを植ゑたり。たわわに・その果実累々として枝も撓むばかりに。〈とををに〉〈たわわに〉〈たわに〉など、みな同じ^{*43}」と述べている。この歌で「たちばな=橘」の句は、呼応するかのように自ずと下句の「いにしへおもほゆ」を導いているが、會津の心境に深入りすれば、当然、明日香の橘寺を連想していたものと思われる。無論橘寺は、聖徳太子建立七大寺の一つ。會津はこの11月の九州巡歴に先立つ夏に大和古寺巡礼を行い、その際に東大寺、法隆寺、薬師寺、室生寺等と共に橘寺も巡拝し、更にこの後10月19日から同27日まで奈良古寺再訪に及び、聖徳太子墓参をも果たしている。事実この後に拙

論で触れる九州巡察が控えていた。よって、「たちばな」と「いにしへ」は直結し得る状況にあったと見てよい。ちなみに「たちばな」は「立花」と呼ぶ旅館であり、絵はがきが残っている（図1）。宿は、別府・大分間を走る海岸沿いの電車路に面して立地していたことが分かる。なお、「たちばな」に関して、書簡にはないが歌集には次の一首も見られる。

わが ころろ つくし の はま の たちばな の いろづく ま で に
あき ふけ に けり*44（歌集）

自註では、わがころろ・「つくし」の枕詞、と触れる*45。なお「つくし」は、古代では、九州地方全体をさす語「筑紫」とも重なる。「ころろつくし」が、「もの思いの限りを尽くすこと」ならば、まさにこの時期の會津は、関西、四国、九州への「思い切りの良い」長期に渡る羈旅を頻繁に繰り返しており、自ずとそれに伴う収穫、とりわけ作歌も古美術研究も稔り多い結果を得ていた。ここでは、深まり行く秋と自身の成果の深まりを重ねることも許されよう。その意味で「たちばな」は、會津の自信の程の色合いを示すとも見える。なお、中国、四国、九州などは柑橘類栽培の盛んな所であり、橘は松などの常緑樹とともに庭木として植栽されることが多い。

14 濱の湯の庭木の間にいさり火の数もしられずみゆるこのごろ（窓前*46）

はま の ゆ の には の このま に いさりび の
かず も しられず みゆる このごろ*47（歌集）

書簡では「しられず」と示すが、自註では「しられず・知れぬほど」と記す*48。歌集では、文字はすべてかな文字変換。なお、漁火は別府湾にて漁を行う舟の灯火。ちなみに、會津の逗留した浜脇温泉は文字通り別府湾を望む海浜に隣接し、間近に良港と明媚な高崎山を控え、山も海も愉しめる景勝の地である。しかも薬師堂がその温泉の中心にあり、信仰と温泉との関わりが深い名湯でもあった。古来文人墨客が往来し逗留したことでも有名である。

15 濱の湯の木の間にみゆるいさり火の数も知られず秋ふけにけり（コチラガヨロシカランカ）
或は

16 濱の湯の庭よりみゆるいさり火の数もしられず秋ふけにけり（？）

（小生は最後のものを最もよろしく存じ候。御定め被下度候）*49

14の歌について會津は迷いを抱き、15・16の二首（書簡）を追加し、その甲乙を市島春城に問うている。ただし、歌集には未収録である。この日、會津は「別府も濱脇以外の温泉へはいまだ一回も入浴いたさず、これからあちこち巡浴可致候」と述べるが、「本朝湯ふねにて歌をおもふ」と実に13首も残している*50。当時、別府には八湯の有名な温泉が湧き出していた。次の地獄めぐりはその代表的温泉地である。

大正10年11月27日 別府より 東京市牛込東町 市島春城宛 絵はがき（豊後亀川鬼の石窟遺物）*51

書簡には「本日は地獄めぐりをと存じ、二つ三つめぐりてそれから鬼の岩屋をみてかへり候」と記す。いわゆる「地獄めぐり」は、今日も有名な別府市の鉄輪から亀川一帯に点在する7-8の

温泉スポットを指すもので、おそらく會津は鉄輪温泉の地獄を見て、その後に鬼の岩屋を探訪したものである。この一帯には古墳が数カ所点在するので、會津の関心を強く誘ったものと考えられる。ちなみに鬼の岩屋古墳は、6世紀末（飛鳥時代）の造営と見られるが、そのあたりには、現在鎌倉期の一遍上人に因む「上人」と呼称する地名が残る。事実古墳は別府上人小学校隣接地にある。かつての絵はがき（図2）が今も残っている。歌は次の通り。

17 ゆふさればほとぎのさけをかたまけていはやのつきに鬼の酔ふらむ^{*52}

書簡には「古墳には相違なけれども岩屋といふ方がおもしろく被存候^{*53}」記す。一方、歌集には「鬼の岩屋といふところにて」として紹介。「かたまけて」は「かたまけて」と改変され、漢字はすべてかなに変換されている。また自註では「鬼の岩屋・かかる名の洞穴別府の海岸にあり。ほとぎ・缶。胴太く口小さき土器の壺。かたまけて・傾けて^{*54}」と触れている。なお、會津の言う「海岸」は、鬼の岩屋古墳から真正面の眼下に見える松の美林が続く海岸を指す。そこは鎌倉期に一遍上人が、伊予国より舟で到着した記念碑の史蹟である。會津の言う「地獄めぐり」の場こそ、まさに一遍によって湯治場として弘められた名湯である。

ゆふ されば ほとぎ の さけ を かたまけて
いはや の つき に おに の ゑふ らむ^{*55} (歌集)

この歌は、鬼が酔うというユーモラス感の見られる一首である。今なお飛鳥地方の「鬼の俎」「鬼の雪隠」に見られるように、鬼と古墳との縁の深さを思い知らされる一首となっている。言うまでもなく、地獄には鬼はつきものであるが、「地獄めぐり」の一角に「鬼山地獄」もあることを思えば、まさにこの一首は、鬼と古墳が連想され直結する性質を内包している。

大正10年11月29日 大分県別府町立花屋別荘より 越後五泉町 式場益平宛 絵はがき
(自性寺の大雅堂)

書簡には「これ即ち中津の自性寺の大雅堂なり。十畳二間あり。四方の襖は悉く霞樵の筆なり。貴兄の歌集はみものなるべし。其刊行さるゝ日を待ち可申候」とある。さらに続けて「真情の御手紙拝誦いたし候。こちらは毎日読書と散歩と浴泉と探仏とをかかはるがはるに致し居り候。大分県には千年以上を経たる石仏の傑作多し。其数二百余軀に上るべし。此行それを悉く見つけたしと存居候^{*56}」と逗留中の生活と目的が垣間見え興味深い。なおこの石仏については別稿に譲る。

18 いかし湯のあふるゝなかにもろあしをゆたけくのべてものおもひもなし^{*57}

歌集では次の通り、全部仮名文字。

いかしゆ の あふるる なか に もろあし を
ゆたけく の べて もの おもひ も なし (前記10の歌参照)。

大正10年12月3日 別府より 市島春城宛 絵はがき (正倉院御物)

書簡に「今朝夢中にて一首を得候。夢中に詩歌をつくることは古来多く傳ふるところ、小生も其の経験は稀ならず候へども、みな身心の多少疲れたるときの所産なるらしく存じ候。今暁のものは」と記す^{*58}。

19 をちこちの嶋のほころのもろ神にわが歌よせよおきつしら浪^{*59}

書簡は「といふに有之、文句は起きいで、後推敲を加へんとしたれども一字をも改むること能わず、すべてそのままに御坐候。何等か意味あるらしく又無きが如く、聊か捨てがたく存候につき御高鑑を乞ひ候^{*60}」と市島春城宛に述べている。

をちこちのしまのやしらのもろがみに
わがうたよせよおきつしらなみ^{*61} (歌集)

漢字はすべてかな文字変換。自註は「夢想・ここにては〈空想〉にはあらず。睡眠中に作りて、醒めて後尚ほ記憶せる詩歌の類を神仏の靈感などの如く思ひて〈御夢想〉などといふ^{*62}」。朝見た夢の中にての一首。歌中の「よせよ」は「よす」と命令の「よ」からなる。「よす」は歌を主にすれば「贈る。供える」となり、一方波を主とすれば「寄せる。近づける」に係る詞と考えられる。なお書簡には「本日はまた石仏見学のため出遊のつもりにて候。竹田町附近と心ざし候。だんだん晝べ候ところ、あまたあちこちにありて困るほど多数に御坐候^{*63}」と見えるが、この石仏については詳論を要するので別稿に譲る。

大正10年12月7日 別府より 市島春城宛 絵はがき (三枚つづき、正倉院御物と什物)

書簡には「別府の山も海もすでに二週間以上に相成り候ため、どちらをみても珍しからず(其くせあまり見物もして居らぬわけにて候へども)従て歌なども出来さうも無之候へども^{*64}」と記す。なお、この時の体調は「竹田にていたためし腸尚ほ癒ず、何となく元気もなく従て議論も無之候^{*65}」と触れている。

おわりに

いよいよ會津は別府温泉逗留を終え、冬の九州路を悠々と次の旅程で周遊する。耶馬溪、観世音寺、戒壇院、都府楼、天満宮、東光院、熊本・日奈久温泉、人吉林温泉、長崎・崇福寺、長崎から船中の客と化し、巖島(神社宝物・大願寺)、尾道・浄土寺(聖徳太子像拝観)を経て大阪へ至る大巡察である。その大阪の寄宿先伊達方から市島春城へ宛てた大正10年12月29日付けの書簡で會津はこう語る。「小生は此度の旅行中は別府にてもとめたる竹籠を底につけたる頭陀袋と奈良にてもとめたる洋杖一本にて、明日をさだめぬ一去一住にて、それをまた羨ましいなどと申候人も一人ならず有之候。これ亦た世相表裏無限の妙味を存するところかと存じ候^{*66}」。ここからは會津の旅装と心境が窺えて興味深い。

大正11年遂に會津は大阪にて新年を迎える。そこを拠点にするやいなや、早速奈良の古寺・古蹟巡覧が再開するが、やがて月半ば大阪を発ち1月15日には高知の知人を訪問(會津関西滞在中の1月10日大隈重信死去)。17日高知校友会にて大隈老侯追悼式に臨席。この後20日宿毛から宇和島へ向かい、更にそこから船にて23日白杵へ至る。24日から27日まで白杵滞在。29日は再度別府へと舞い戻り鉄輪温泉泊(この時立花屋は火事にて焼失^{*67})。2月2日瀬戸内海航路滋賀丸にて伊予へ、太山寺を拝観した後、高濱港から再乗船して大阪へ向かう。2月13日には熱海の坪内逍遙邸を表敬訪問、数日ここで過ごす。

ともあれ、會津の関西・九州間の往還は、目的を定め集中的に行われ、実に大周回軌道を描い

ている。拙論では主に別府温泉逗留中のとりわけ詠歌を中心に述べてきた。しかしながら実は、別府温泉にて口誦しつつ仕上げた詠歌の中には、当地は勿論、法隆寺、東大寺、厳島等の詠歌も含まれていた。

まさに「湯ふねの中にて歌をおもう會津八一」は、実に数多くの歌を詠んでいるが、歌集では未収録、あるいは逆に書簡には見られないが、歌集には収録されているものもある。そこに歌作りの機微や妙味が垣間見える。しかし、当時の書簡を精査すれば、実は會津は詠歌のみならず大分の石仏研究にも精出していたという、極めて重大な事実が判明する。言うまでもなく、臼杵石仏の研究である。それは当時においては、甚だ画期的で瞠目すべきことである。よって、それに関しては美術史学の見地から、稿を改めて詳論する予定である。要するに、この研究は、會津八一が、大正末即ち昭和元（1926）年早稲田大学に於いて専任として東洋美術史を講じる前段階の時期である点に注目していただきたい。まさにこの時期は、後年本格的に展開する會津八一の美術史研究の準備期間にあたる。

- * 1 『會津八一全集第5巻』中央公論社 昭和57年収録『自註鹿鳴集』（『南京新唱』）P39。以下『會津八一全集』を『全集』と略記する。『全集第4巻』P18
- * 2 『全集第12巻 雑集 索引』中央公論社 昭和59年 P367
- * 3 『全集第4巻』p24、『全集第3巻』の『自註鹿鳴集』中に再収録『南京新唱』P56)
- * 4 『全集第8巻』p316
- * 5 『全集第5巻』P57、『全集第4巻』P24
- * 6 同上
- * 7 『全集第8巻』P316
- * 8 『全集第8巻』P314
- * 9 『全集第4巻』P349
- * 10 『全集第4巻』P44、『全集第5巻』P96
- * 11 『全集第4巻』P349
- * 12 『全集第4巻』P13、『全集第5巻』P26
- * 13 『全集第5巻』P27
- * 14 『全集第4巻』P10、『全集第5巻』P20
- * 15 『全集第5巻』P20、なお筆者が便宜上、本文中カギ括弧「」を〈〉へ変換。
- * 16 『全集第8巻』P314
- * 17 『全集第4巻』P349
- * 18 漢字辞書的には、菡萏は蓮の蕾をさすが、転じて美人のたとえも言う。現在「かんたん」と地名表示するこの界限は、海陸交通の要所であり、明治17（1884）年開港以来の港町で、今も関西・四国とを結ぶフェリー乗り場がある。またかつては、遊郭が昭和30年頃まで栄えていたと言う。なお別府湾は、明治16年以前は菡萏湾と呼ぶ方が一般的であったようである。ゆえに天保年間（1830-40）編纂の『雉城雜誌』には菡萏江と見える。さらに古く天文年中（1532-55）に豊後に来航した明の阮琳がその形状から菡萏（蓮の花、または蕾）海と名付けたという伝承が見られる（平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系第45巻大分の地名』平凡社 1995年 P45参照）。
- * 19 仲嶺真信「大分元町石仏群の成立年代について」『芸術学論叢第11号』別府大学美学美術史学科1994年
- * 20 『全集第8巻』P316
- * 21 『全集第4巻』P327（「南京詠草」収録）
- * 22 『全集第8巻』P316

- *23 『全集第4巻』 P39、『全集第5巻』 P89
- *24 『全集第5巻』 P89
- *25 『全集第4巻』 P39、『全集第5巻』 P89
- *26 同上
- *27 同上
- *28 『全集第8巻』 P316
- *29 同上
- *30 『全集第4巻』 P329 (「南京詠草」収録)
- *31 『全集第8巻』 P316
- *32 同上
- *33 『全集第4巻』 P41、『全集第5巻』 P91-92 (「放浪喙草」収録)
- *34 『全集第5巻』 P92。なお筆者が便宜上、文中カギ括弧「」を〈〉へ変換。
- *35 『全集第8巻』 P316
- *36 『全集第4巻』 P348 (「南京詠草」収録)
- *37 『全集第8巻』 P316
- *38 猿沢池の畔に工藤写真屋があり、淡島寒月の親友ゆえに訪ねたこと、會津を小バカにしていたこと、二六時中酔っている人だったと言う (『全集第12巻』 p356参照)。中田善明『国宝を撮した男・明治の写真師工藤利三郎』向陽書房 2006年参照。
- *39 『全集第4巻』 P43、『全集第5巻』 P95。歌集では「別府の宿より戯れに奈良の工藤精華に贈る」と記す。
- *40 工藤利三郎『日本精華第九輯 豊州摩崖石仏』精華苑 大正10年。白杵石仏の大判写真が掲載されているが、解説文はない。しかし、当時写真が希有な時代であり、その資料的価値はきわめて高い。
- *41 『全集第8巻』 P316
- *42 『全集第4巻』 P42、『全集第5巻』 P92
- *43 『全集第5巻』 P93。なお筆者が、便宜的に本文中のカギ括弧「」を〈〉に変換した。
- *44 『全集第5巻』 P93、『全集第4巻』 P42
- *45 『全集第5巻』 P93
- *46 『全集第8巻』 P316
- *47 『全集第5巻』 P92、『全集第4巻』 P41
- *48 『全集第5巻』 P92
- *49 『全集第8巻』 P316-317
- *50 『全集第8巻』 P317
- *51 現在鬼の岩窟の絵ハガキは3葉残っている (別府八湯トラスト管理「別府八湯懐古写真集」参照)。
- *52 『全集第5巻』 P94、『全集第4巻』 P43
- *53 『全集第8巻』 P317
- *54 『全集第5巻』 P94
- *55 『全集第5巻』 P94、『全集第4巻』 P43
- *56 『全集第8巻』 P319
- *57 同上
- *58 『全集第8巻』 P323
- *59 『全集第5巻』 P95、『全集第4巻』 P43
- *60 『全集第8巻』 P323
- *61 『全集第5巻』 P95-96、『全集第4巻』 P43

- *62 『全集第5巻』 P95
- *63 『全集第8巻』 P323
- *64 『全集第8巻』 P330
- *65 『全集第8巻』 P329
- *66 『全集第8巻』 P347
- *67 『全集第8巻』 P367



図1 立花屋別荘

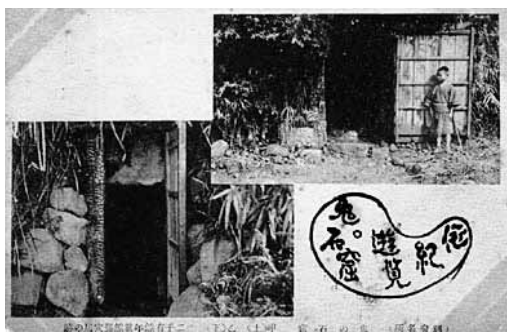


図2 鬼の岩屋古墳

図版出典1・2

別府八湯トラスト管理 (別府市北浜1-12-1 : 代表・野上泰生) 「別府懐古写真八湯」から転載

Yaichi Aizu who Ponders on Tanka in a Bathtub

— On the Composition during his Sojourn at Beppu Hot Springs
in Oita Prefecture in the Tenth Year of Taisho —

NAKAMINE Masanobu

“Tanka”, “Art History” and “Calligraphy” are the three well-known fields where Syuso-Dojin (Yaichi Aizu’s pseudonym) showed his excellence. Each of them is a keyword which displays his characteristics.

He is, above all, eminent as a poet who composed tanka on Nara. There are, for example, some poems composed as “dropping in at Horyuji Temple during my illness” in “南京新唱”. However, when we see the letter of Aizu, it turns out that the place where he actually elaborated the poems is not Nara but the “bathtub” in the Tachibanaya hotel at Hamawaki Hot Spring in Beppu. It was in the bathtub that the poems were completely finished. Thus, if we examine the relation between the place where the poems of Aizu were composed and the time, things of much interest will be discovered.